

## 人文学部・人文科学研究科

I	人文学部・人文科学研究科の研究目的と特徴	1 - 2
II	分析項目毎の水準と判断	1 - 4
	分析項目 I 研究活動の状況	1 - 4
	分析項目 II 研究成果の状況	1 - 10
III	質の向上度の判断	1 - 12

## I 人文学部・人文科学研究科の研究目的と特徴

### 学部・研究科構成

人文学部	人文学科
人文科学研究科	文化構造研究専攻
	地域文化研究専攻

### 研究目的

富山大学は中期目標において、大学の基本的目標として、表 A のような基本理念を掲げている。

表 A 富山大学中期目標における大学の基本的な目標

地域と世界に向かって開かれた大学として、生命科学、自然科学と人文社会科学を総合した特色ある国際水準の教育及び研究を行い、高い使命感と創造力のある人材を育成し、地域と国際社会に貢献するとともに、科学、芸術文化と人間社会の調和的発展に寄与する。

(出典：富山大学概要)

人文学部及び人文科学研究科は、本学の基本理念の実現のためにその一翼を担う立場から、世界と地域に目を向けて人間とその社会・文化の本質を解明することを自らの研究の使命とし、多彩な研究分野を有するという本学部の特質を活かして、研究の活性化と国際的研究水準の達成を目指している。そのための研究体制及び研究支援体制を整備・充実させるための基本方針を表 B のように定める。

表 B 人文学部及び人文科学研究科の研究の基本方針

#### (1) 人文科学の基礎的諸分野の充実

社会的に要請される人文系学部の基本的役割として、人文科学の基礎的研究分野の研究を、適切な人員配置のもと、長期的な視野で推進する。

#### (2) 総合的な「環日本海」地域研究の推進

「環日本海」地域のほぼ中央に位置するという本学部の立地条件を活かして、環日本海地域の諸文化と、その交流と交渉のあり方を総合的に研究し、当該研究における拠点として、国内外の社会的要請に応えるとともに、研究成果の社会への還元に努める。

#### (3) 多彩な研究分野に基づく学部の個性化

考古学、文化人類学、朝鮮語・朝鮮文化、ロシア語・ロシア文化など、全国に類例の少ない諸領域の研究活動を充実させ、人文系学部としての個性化を図る。

#### (4) 研究の活性化と国際水準の達成

研究活動における現代的かつ国際的な要請に応えるために、専門性と学際性の調和した研究体制を構築し、国際シンポジウムの開催や学際的な共同研究などを推進し、研究の活性化と国際水準の達成を図る。

(参照：富山大学人文学部『分野別研究評価自己評価書（人文学系/平成 14 年度着手分）』)

### 特 徴

本学部は、昭和 24 年、旧制富山高等学校の一部を母胎として、富山大学文理学部文学科として創設された。

文理学部文学科は、当初、旧制高校から継承した哲学・史学・国文学・英文学・ドイツ文学から構成されていたが、昭和 52 年、理学部と人文学部が分離独立し、昭和 55 年度には 2 学科（人文学科、語学文学科）16 コース（専門分野）となった。

この学部独立に際しては、同学部が人文系の新設（後発）の学部である点や、所在地（富山県富山市）が日本海沿岸の中心的位置にあるという地勢的特色に留意して、近隣諸県にない

か、あるいは不足している個性的で特色ある研究分野や、環日本海関連の研究分野を拡充することに力点が置かれた。前者の観点から、文化構造論(当初比較文化)、比較文学、考古学、文化人類学(アフリカ研究中心)などが、専攻分野として設置された。また後者の観点から、ロシア語・ロシア文学、朝鮮語・朝鮮文学の諸コースがそれぞれ新設され、すでに昭和49年に国文学コースから分離独立していた中国語・中国文学コースとともに、環日本海諸地域の諸文化や言語を教育・研究する体制が強化された。さらに平成5年、教養部の廃止と学部再編によって、心理学、社会学、フランス言語文化などのコースを新設し、基礎的な研究分野をいっそう拡充するとともに、国際文化関係論(現在は国際文化論)、比較社会論(現在は国際関係論)などの学際的な諸分野も加えられた。

昭和61年には大学院人文科学研究科(修士課程)が創設され、より高度な専門的研究・教育を目指すことになった。当初は日本・東洋文化専攻と西洋文化専攻を設置した。平成9年には、文化構造研究専攻と地域文化研究専攻とに再編された。

学部の講座組織はその後、小講座から大講座への改変を基本方向として、平成17年度に再度改組され、平成18年度現在は下表のような1学科7大講座から編成されている。

講座	コース	教育研究分野
人間科学	哲学・人間学	哲学 人間学
	言語学	言語学 日本語教育学
	心理学	心理学
歴史文化	歴史文化	日本史学 東洋史学 西洋史学 考古学
社会文化	社会文化	国際関係論 社会学 人文地理学 比較文化 文化人類学
国際文化論	国際文化論	国際文化論
東アジア言語文化	東アジア言語文化	日本語学 日本文学 朝鮮言語文化 中国言語文化
英米言語文化	英米言語文化	イギリス言語文化 アメリカ言語文化
ヨーロッパ言語文化	ヨーロッパ言語文化	ドイツ言語文化 フランス言語文化 ロシア言語文化

(出典：国立大学法人富山大学人文学部 2008 (学部案内))

[想定する関係者とその期待]

#### 1. 学術研究

人文学部教員の属する多様な専門分野の研究者からは、当該専門分野において研究推進を行うことや、学会・シンポジウムの開催などにより研究交流を促進することを期待されている。とりわけ、いわゆる「環日本海」諸地域の諸文化理解に寄与することを期待されている。

#### 2. 学術研究成果の社会還元

国・地方自治体・地域社会からは、社会と文化に関わる諸問題の検討や「環日本海」諸地域の異文化理解等の現場において、シンク・タンクの役割を果たすことを期待されている。具体的には、シンポジウム等を通じて知の社会還元を行うことや、審議会等の委員として貢献すること、また、地域社会の文化活動に対して助言を与えることなどを期待されている。

## II 分析項目毎の水準の判断

## 分析項目 I 研究活動の状況

## (1) 観点毎の分析

## 観点 1-1 研究活動の実施状況

## (観点に係る状況)

人文学部・人文科学研究科の所属教員が平成 16 年度 4 月から平成 19 年度 12 月までに論文・著書等で発表した研究業績数は、資料 1-1-1 のとおりである。本学部・研究科の研究基本方針に照らせば、(1) 基礎的諸分野が約 57%，(2) 環日本海諸地域研究が約 34%，(3) 多彩な研究分野に該当するものが約 12% ((2) と重複) となる。

資料 1-1-1 人文学部・人文科学研究科の年度別研究業績数

	平成 16 年度	平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度	合 計
論文 (単著)・著作	54	63	79	48	244
論文 (共著)	4	5	9	2	20
書評・翻訳等	5	8	12	5	30
その他	3	3	2	9	17
合 計	66	79	102	64	311

(データは教員個人からの業績報告に基づく)

人文学部・人文科学研究科の所属教員が平成 16 年度から平成 19 年度 12 月までに学会等で行った研究発表の回数は、資料 1-1-2 のとおりである。

資料 1-1-2 人文学部・人文科学研究科の年度別学会等発表数

平成 16 年度	平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度	合 計
40	43	35	11	127

(データは教員個人からの業績報告に基づく)

この他にも毎年一定の数のシンポジウム等が開催されている。人文学部・人文科学研究科の所属教員が主催したシンポジウム等は、資料 1-1-3 のとおりである。その内容は環日本海関係のものなど、人文学部の特色を強く反映したものが中心であり、また地域との密接な結びつきを持って開催されているものが多いことも特記すべきである。

また学会役員や学会誌編集委員を務めている教員も非常に多く、各分野の研究において積極的に本学部教員がかかわっていることが看取できる。その数も毎年着実に増加しており、学会での存在感も増している。また同時に、富山県などの地域的な学会・審議会等で重要な役割を果たしている教員も多く、ローカルな観点からも本学部教員の研究活動が大きな意味を持っていることが明白である。人文学部・人文科学研究科の所属教員が委員を

務めた審議会等は、資料 1-1-4 のとおりである。

資料 1-1-3 人文学部・人文科学研究科の年度別シンポジウム等年度別開催状況

平成 16 年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・韓中日国際シンポジウム「漢字教育最前線」</li> <li>・日本言語学会 129 回大会</li> <li>・海域世界のネットワークと重層性</li> <li>・文部省科学研究費特定領域研究「東アジアの出版文化の研究」F 班研究会</li> <li>・日本の社会言語学とは－新しい学の創造にむけた富山からの提言－</li> <li>・日本海沿岸の自然と環境認識の構図－歴史・文化・言語－</li> <li>・環日本海地域の人的交流と日本語</li> <li>・考古学から見た日本海沿岸の地域性と交流</li> <li>・立山への道－その歴史と信仰</li> </ul>
平成 17 年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・富山大学人文学部同窓会平成 17 年度総会講演「ロシアはどこから来て、どこへ向かうのか」</li> <li>・氷見古墳フォーラム 日本海－交流する王者たち～柳田布尾山古墳と阿尾島田 A 一号墳～</li> <li>・海域世界のネットワークと重層性（公開研究会）</li> <li>・中部弥生時代研究会第 11 回例会</li> <li>・海域世界のネットワークと重層性（公開シンポジウム）</li> <li>・ソーシャルスキルトレーニング公開研究会</li> <li>・立山と越中の山岳信仰を考古学する</li> <li>・日本人にむけられるアジアの眼差し</li> <li>・日本海沿岸の自然と環境認識</li> <li>・とやま・ことばのフォーラム「富山弁から外国語まで」</li> <li>・北陸の古墳編年の再検討</li> </ul>
平成 18 年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本音楽療法学会信越北陸支部第 4 回学術大会</li> <li>・シンポジウム『東アジアの出版と地域文化』</li> <li>・富山大学人文学部とノヴォシビルスク大学人文学部との交流に関するワークショップ</li> <li>・東アジア学術文化交流講演会『激しい変化の中の中国知識人たち』</li> <li>・東アジアの言語文化交流ワークショップ－異文化理解を深めるために－</li> <li>・ワークショップ「異文化社会から見える男女共同参画」</li> <li>・日本海沿岸の自然環境と食の特徴</li> <li>・北から登る立山信仰－上市黒川遺跡群と大岩山日石寺磨崖仏－</li> <li>・環日本海ジェンダー講演会第 1 回公開シンポジウム</li> <li>・環日本海ジェンダー講演会第 2 回公開シンポジウム</li> </ul>
平成 19 年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「アフリカの平和力」ワークショップ</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"><li>・アジアアフリカ学術基盤形成事業「東アジア出版文化国際研究拠点形成及びアジア研究者育成事業」「セミナー東アジアむかしのほんのものがたり」</li><li>・日本国際地図学会地方大会</li><li>・日本独文学会北陸支部研究発表会</li><li>・「民族医学の地平」研究会</li><li>・海のローマ帝国と森のローマ帝国～巨大帝国の実態と解釈について～</li><li>・「生態人類学会」第13回研究大会</li></ul>
--	--

(データは教員個人からの業績報告に基づく)

資料 1-1-4 人文学部・人文科学研究科の年度別審議会委員等就任状況

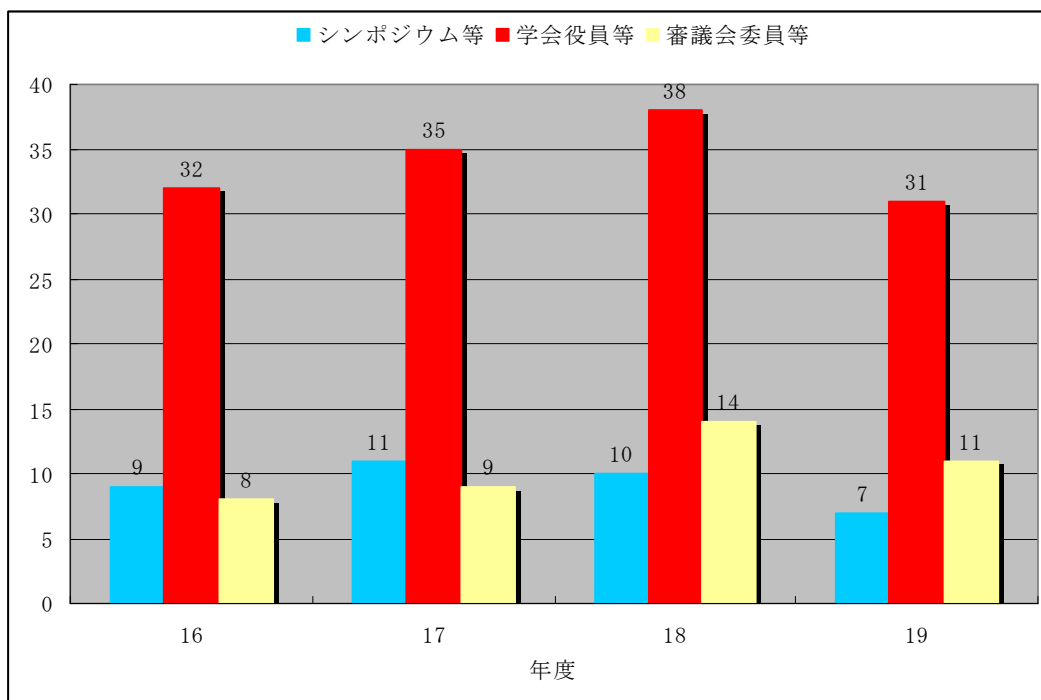
平成 16 年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文化庁文化審議会文化財部会第一専門調査会古文書部会</li> <li>・富山県芸術文化協会</li> <li>・富山県高等学校評議会</li> <li>・富山県男女共同参画推進委員会</li> <li>・氷見市史編纂委員会</li> <li>・新潟県新井市斐太歴史の里調査委員会</li> <li>・エコ地図づくり実行委員会</li> <li>・非営利特定法人子ども&amp;まちネット</li> </ul>
平成 17 年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文化庁文化審議会文化財部会第一専門調査会古文書部会</li> <li>・富山県芸術文化協会</li> <li>・富山県高等学校評議会</li> <li>・富山県男女共同参画推進委員会</li> <li>・富山市文化財保護審議会</li> <li>・氷見市史編纂委員会</li> <li>・射水市新湊地区洪水ハザードマップ作成委員会</li> <li>・エコ地図づくり実行委員会</li> <li>・非営利特定法人子ども&amp;まちネット</li> </ul>
平成 18 年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文化庁文化審議会文化財部会第一専門調査会古文書部会</li> <li>・富山県芸術文化協会</li> <li>・富山県高等学校評議会</li> <li>・富山県男女共同参画推進委員会</li> <li>・富山県インターンシップ推進協議会運営委員会</li> <li>・富山市文化財保護審議会</li> <li>・富山市「王塚・千坊山遺跡群」保存管理計画策定委員会</li> <li>・氷見市文化財審議会</li> <li>・新湊消防署防災センター展示設計候補者選定審査委員会</li> <li>・小矢部市洪水避難地図検討委員会</li> <li>・新潟県新井市斐太歴史の里調査委員会</li> <li>・関西エコ地図コンクール</li> <li>・高知市史編さん委員会民俗部門</li> <li>・非営利特定法人子ども&amp;まちネット</li> </ul>
平成 19 年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・富山県芸術文化協会</li> <li>・富山県男女共同参画推進委員会</li> <li>・富山県インターンシップ推進協議会運営委員会</li> <li>・氷見市洪水避難地図検討委員会</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"><li>・射水市洪水ハザードマップ検討委員会</li><li>・魚津市洪水ハザードマップ検討委員会</li><li>・立山町・舟橋村洪水ハザードマップ検討委員会</li><li>・船橋村村民憲章策定WGアドバイザー</li><li>・高知市史編さん委員会民俗部門</li><li>・児童・生徒地図作品審査</li><li>・非営利特定法人子ども&amp;まちネット</li></ul>
--	--

(データは教員個人からの業績報告に基づく)



資料 1-1-5 シンポジウム等年度別開催状況／学会役員・審議会委員等年度別就任状況



(出典：人文系支援グループにて調査)

年度別の科学研究費補助金申請率と採択率に関する状況については、人文学部の平成 16 年度、平成 18 年度新規申請採択率はそれぞれ 29.6%・29.2%で、全国の採択率 24.8%・23.5%を上回る。平成 19 年度は全学で申請促進のための制度が設けられたため採択件数、採択件数比率及び採択額はいずれも着実な伸びを示している。

資料 1-1-6 人文学部科学研究費補助金 年度別申請・採択状況一覧

	申請 資格 者	新規 申請 件数	申請件 数 (継続分 含む)	申請比 率 (%)	新規 採択 件数	新規採択 率 (%)	採択件 数 (継続分 含む)	採択件数 比率 (%)	採択額 (継続 分含む) (千円)	1 件当た りの平均 採択額 (千円)
	a	b	c	100*c/a	d1	100*d1/b	d2	100*d2/c	e	e/d2
平成 16 年度	70	27	43	61.4%	8	29.6%	24	55.8%	37,000	1,542
平成 17 年度	69	25	38	55.1%	4	16.0%	17	44.7%	32,400	1,906
平成 18 年度	72	24	36	50.0%	7	29.2%	19	52.8%	38,300	2,016
平成 19 年度	72	54	64	88.9%	10	18.5%	20	31.3%	43,700	2,185

(出典：人文系支援グループにて調査)

## (2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

人文学部・人文科学研究科の平成 16-18 年度の研究業績数は、毎年度一定水準を超え、また、着実に増加している。基礎的諸分野の研究が大きな比重を占めているのは人文系学部の特質であり、それらとともに本学部・研究科の研究における重点領域「総合的な『環日本海』地域研究の推進」に沿った諸分野の研究業績が約 3 分の 1 を占め、本学部・研究科の研究目的の達成に寄与している。

学会発表数、シンポジウム開催数、学会等役員など、広義の研究活動に関しても毎年度期待される水準を維持している。他方、科学研究費補助金に関しては、採択件数、採択件数比率及び採択額はいずれも着実な伸びを示している。

以上を総括し、全体として本学部・研究科の研究活動は活発に行われており、期待される水準にあると判断する。

## 分析項目Ⅱ 研究成果の状況

### (1) 観点毎の分析

観点 研究活動の実施状況

(観点到に係る状況)

人文学部・人文科学研究科では、本報告書冒頭に掲げた研究の 4 つの基本方針に基づき、研究活動が進められてきている。

#### ① 人文科学の基礎的諸分野の充実

基礎的研究の継続的な充実是人文学部のもっとも根本的な責務であるが、そうした研究には、大きくは実証研究と理論研究の分野がある。本学部・研究科では、存続の危機にある少数民族言語の研究 (I 表No.1007)、人権論・差別論に関する理論的研究(I 表No.1014)など、実証と理論の両面から優れた研究がおこなわれている。また、人文的知の社会への還元のための啓蒙的な著述活動は、人文学研究の本質の一部を構成するが、それに該当する業績として、ロシア詩の鑑賞法に関する著作 (I 表No.1002) や、フランスの著名伝記作家の作品の初訳書の出版 (I 表No.1003) などが挙げられる。

#### ② 総合的な「環日本海」地域研究の推進

いわゆる「環日本海」地域の研究は本学部・研究科の特色となるものであるが、そうした分野の研究として、旧満州の文化史研究 (I 表No.1010)、海路による大陸との交流を視野に入れた日本海地域の古墳の考古学的研究 (I 表No.1012)、学際的観点に立った

日本海文化交流の研究（I表No.1008）などがある。また、中国出版史の日本への影響に関する論考（I表No.1004）、中国文学の日本における研究史の紹介（I表No.1005）、朝鮮古典籍の先駆的な研究（I表No.1001）や、朝鮮近代文学の研究（I表No.1006）など、「環日本海地域」の諸文化の多角的研究がおこなわれている。近代日本へのアメリカ合衆国の接近の問題を重層的な文化交流の観点から扱った研究（I表No.1009）も、広い意味で「環日本海」文化研究の一部を構成する。

### ③ 多彩な研究分野に基づく学部の個性化

考古学、文化人類学、朝鮮語・朝鮮文学、ロシア語・ロシア文学などの諸領域は、地方国立大学が有する研究分野としては数少ないものであり、本学部・研究科の個性化を担う重要な領域と考えている。それらの諸領域において、日本海地域の古墳研究やアフリカ研究（I表No.1013）など、フィールド・ワークを基礎とした質の高い研究が展開されている。朝鮮、中国、ロシアなど、日本海を挟んで隣接する諸地域の文献学的研究が活発に行われていること（I表No.1001,1004,1005,1002）も、本学部・研究科の重要な特徴である。

### ④ 研究の活性化と国際水準の達成

中国文学研究の中国本国における出版（I表No.1004,1005）や、文化人類学研究における欧米研究者との共同（I表No.1013）、朝鮮文学・文献学の研究（I表No.1001,1006）など、国際的な認知度の高い研究がある一方、たとえば英文雑誌による情報発信や外国研究者の招聘による共同研究の展開などの面で、研究のいっそうの国際化を図ることは、今後さらに改善すべき課題である。

## （2）分析項目の水準及びその判断理由

（水準）

期待される水準にある。

（判断理由）

人文学部では、研究の基本方針に従い、学部・研究科等を代表する研究業績リスト、研究業績説明書に代表されるようなすぐれた研究業績があがっている。それらの多くは、書評、論評などの形で学会からの認知を受けたものであり、また、本学部の研究者等がパイオニア的役割を担っている諸領域や、海外における受賞や博士号認定の対象となった研究もある。国際共同プロジェクトも、端緒的ではあるが取り組まれている（資料 1-1-3 「人文学部・人文科学研究科の年度別シンポジウム等年度別開催状況」参照）。

以上のことから、人文学部・人文科学研究科の研究活動は、期待される水準にあると判断する。

### Ⅲ 質の向上度の判断

#### ① 事例1「科学研究費補助金の獲得に向けた取組」(分析項目Ⅰ)

(質の向上があったと判断する取組)

科学研究費補助金の申請率は、平成19年度になって改善され、40%前後から60%台に上昇した。また、新規申請採択率は、平成16年度が29.6%、平成18年度が29.1%で、いずれも全国平均(24.8%、23.5%)を上回っている。

以上のことから、研究水準の向上があったと判断する。

#### ② 事例2「研究活動活性化に向けた取組」(分析項目Ⅰ)

(質の向上があったと判断する取組)

平成16～18年度の研究業績数は、毎年度一定水準を超え、着実に増加している。基礎的諸分野の研究とともに、本学部・研究科の研究基本方針に沿った諸分野の研究業績が約三分の一を占めている。学会発表数、シンポジウム開催数などは毎年度相当の水準を満たしていると判断する。また、学会役員等は着実に増加しており、広義の研究活動に関しても、研究水準の向上があったと判断する。

#### ③ 事例3「各賞の受賞状況」(分析項目Ⅱ)

(高い水準を維持していると判断する取組)

朝鮮文化に関する研究の韓国・宝冠文化勲章の受章(I表No.1001)は、日本の研究者に対するものとしてはきわめて異例のことであり、特筆すべき成果といえる。また、韓国文化振興財団からの出版助成金の獲得(I表No.1006)、啓蒙書としての意義を評価された日本図書館協会推薦図書に認定(I表No.1009)などがある。

以上のことから、研究水準の向上があったと判断する。

## 学部・研究科等を代表する優れた研究業績リスト(I表)

法人名	富山大学	学部・研究科名	人文学部・人文科学
-----	------	---------	-----------

### 1. 学部・研究科等の目的に沿った研究業績の選定の判断基準(200字以内)

学部・研究科等の研究の基本方針に従い、環日本海地域の文化研究、国際化の動向に合致する研究、また、内外の学界において反響を得たものなどで、特に学術的意義と社会的貢献度の高いものを選定する。

### 2. 選定した研究業績リスト

No	研究業績名	細目番号	研究業績の分析結果		重複して選定した研究業績		共同利用等
			学術的意義	社会、経済、文化的意義	業績番号(重点的に取り組む領域)	業績番号(他の組織)	
39 1 1001	日本現存朝鮮本研究 集部	2903	SS				
39 1 1002	ロシア詩鑑賞ハンドブック	2903		S			
39 1 1003	アンリ・トロワイヤ『ヴェルレーヌ伝』	2903		S			
39 1 1004	關於中国才子佳人小説对東亜的影響—以『二度梅』和『好逑伝』为中心—	2903	S				
39 1 1005	日本沈従文研究的昨天、今天、明天	2903	S				
39 1 1006	李光沫小説の生命意識研究	2903	S				
39 1 1007	コリヤーク言語民族誌—ことばに刻まれたトナカイ遊牧民の文化—	3001	S				
39 1 1008	日本海総合研究プロジェクト研究報告1「日本海/東アジアの地中海」	3002	S				
39 1 1009	黒船とニッポン開国	3102		S			
39 1 1010	馬賊で見る「満洲」—張作霖のあゆんだ道	3103	SS				
39 1 1011	Gender Ideology in the Rise of Obstetrics	3104	S				
39 1 1012	阿尾島田古墳群の研究—日本海中部沿岸域における古墳出現過程の新研究—	3105	S				
39 1 1013	アフリカ熱帯森林住民の文化保全と内発的発展に関する研究	3301	S				
39 1 1014	差別論—偏見理論批判	3801	SS				